

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

手紙の集

手紙の集
巻之二

7



9131



昭和十三年
10月13日

木村貞一殿寄贈

葎居集下巻

長歌之部

春奥

あー川の山辺をさぐれば春されはますつゆとりの鶯の
 木の意く野辺これのまをさうらうと柳のつらみ
 うぐれにさきくさ雀さうらうとつらうと春のたけ
 とまほらをはなのちりさきさふ駒ちてあーひ川よち
 花くさうさうらうのけりて村まのむれまゆら小女ら
 をとたさひまるとさう野をたうらうとさうらうまに
 つらぬきさうらうとつらうとつらうとつらうのゆめ



たのききをいふ今よりさうさう

赤根さん日の思せれいう程くとせりふりあきし人

薄暮時鳥

あー川の山はふさふさうたぬくんとしうー君におほ
やうのさうーけくとたぬれのさうーきよこのさうとせ
君うのさうさうれたさや志とほくきん何ーみんうハ
あぬうぬぬとて先てきよさう君とうれたさや志とせ
きぬうぬいせんすへをぬく麻のぬれ秋をちきりてい
つらふ君をこいーつをさうのさうさう
ほくきんやうーとこせの思ひら先君うぬれいさやとせにる

雨中佃代

宇治川ふあーろりら思日刺方のぬのさうあはさうさ
ひを多さういぬれせほちつともあーろりら思

冬祝

春されハ水に冬うりあらさうをほきさういーつ苗代を
ひくくぬ前交されハ水味うさうめひちうこをさうさ
よせつと早苗さうり杜あーたぬれハやさうぬのさうさ
めちて前をさう先白ふらうつと大君のさ前前のさつさ新
掌の祢のさうとみさひあくる冬の始ハたさうてゆさ
そとゆる世さうハ安の河系ハ祢さうりゆはうりあいて
くうこれ天のゆふハの稲さぬを指くさうりまのせうは先

ちよまの神の命の志ありて免れ皇ののくぬちよまの
 ちよま生彦をりてつづの木のやつさく小葉えこ
 今の現を志つてまさい甲きさむらふ神者ふあうぬ
 こしねこつせこいさるおとのこあ入れて天のトあ六圍
 ちよまさうまあれとつてあうとつていあらん赤のさう
 日のまうと天地の神のりさる大君のさうの楯穂の葉
 穂の足てさきと大津圍こへ
 許つさうとあひぬはちうと年乞の神のさうとちあうと

縣居の公翁をちよ免て祭りたる時ふ

交時の大和の國ハ神ちつとくとあうせぬ國をうれとん
 ちよハ言あうんちよとさうやさうとむまの神むまの神祖の
 命の大所言かくありまうてさうと穂の岳ふありりしつら
 され山あうつらうと免れさうとちよ申してかたらの
 畝中のまよ天のト知て免さうと免たくいたさ功をさう
 万せりいつつれりまのやこつらん神の命其神のことと
 名ふむひてつづの木のいやつさうとみり水のくゆること
 るく傳をねる賀茂ちよ氏の人さうとさうとあれと
 天地の神あひうつぬい風のまをさう神祖のこたさうと
 ちよいさうらんまをさうあうとのまこれのさう人の里ふ

あれま〜は神を祀はるまゝや神の大まぢのいひ〜ら
あやふく〜きとて〜らうまらふみえてこりぬれ
下ふらりの八百年〜年〜を脱けりて
船のほりきう時あふく〜り世の人故を〜へりられ
馬のつ先いつく〜きりこまほをもの〜する路しくあれ
ちりさふつち〜こ船を〜しまつろひ〜年〜の
夜〜ころりし外國のりす〜の〜へ忘れ
所國に〜百十國の親と〜と〜ん〜えて君を
〜こ〜たぬ〜ん〜を〜うすれ〜おのうさ
脱いやり〜ら〜り申〜を〜は神の

まら神祖は免ろさを及ひき申しは神はそのいぬらき
の大を〜世の人皆成〜り氏のりさを我あや〜
おむ〜き〜あ〜〜き〜我を申ふ〜
りさ我〜年〜ま〜あ〜き〜ぬい〜あり
〜は〜ら〜つ〜て船ふらよの〜え
いのらんとおひお〜て〜のきり〜のこの
八十つきまで絶せ〜とうらひ〜てあ〜り貴武將の
るの祖の神の命と大所名をた〜り〜るに
保〜り保〜り〜あ〜〜のむ
救ち〜ぬ〜〜〜に後れた申す

又同—祭ありふ開書思古とりよ題よそ

あはれとわんわんけあらふ耳にあれとこひきらふ
然にあれとこひきらふけあらふまはるけのこころ
あはれとこひきらふけあらふまはるけのこころ
あはれとこひきらふけあらふまはるけのこころ
あはれとこひきらふけあらふまはるけのこころ
あはれとこひきらふけあらふまはるけのこころ
あはれとこひきらふけあらふまはるけのこころ
あはれとこひきらふけあらふまはるけのこころ
あはれとこひきらふけあらふまはるけのこころ
あはれとこひきらふけあらふまはるけのこころ

又同—祭ありふ速懐とりよ題よそ

古の人ふ家あらふ縣居の暮つと水くこつとくまりの
大人をや縣居の大人りやいあふ大人家をやいふあふ我奴
た刀名んえんそん新玉のこけきくあはれ

海邊

喜海系ありさけこつ楫の喜れつとらふあはれつこい
あやさあうこくさく夜玉けらと三葉の仲よこそ
おきそ白浪をこよふとほげ味のこまうさきりこ天
思ふ所のこひきらふ家あふまはるけのこころの母こちのや
りん林のこひきらふ

百八十の園のこひきらふこつとれ林よつとらふ大所園を

山家

白き花はゆきさけりうらうらとよきとよしのをらぬ言ふは
 まは「こき」あらぢやれや大君の春花のさうゆくは代
 とくすのてのきんこうのひ別々家々をねハ若くぬの
 うーうーうーとよきうううとよきうんきぬーにけむせ
 涼岩のぬれ門の井とくこて是れむとぬにらやうあ
 ーいらけゆく今らうのーきせよそそありられ
 あー川のゆきとけらふにやこいてたらぬとぬよまらうん

鳴尾の船主竜馬何うう庭ふ青桐を極く其うこをめりよあふ

あふハあれと相とそようれ相ハあれとさこそようれさう

葉の廣き枝うれハまさきの柳りうこをさめりとのふとさ枝
 みれハまさきれうこをさうこと極ぬくーまさき相のよまらうえ
 の度さうあけいぢひろふあハひろうさうりれこのふとさう
 あけいぢあうこをまさきの極たぢやさうえんむとらう思根よ
 大舟のゆさうよせをさゆさうらんまさきとさうれハ命のよこりよ

大井川のまうて鴻田の家ふくー有たる財ふ泳。

平一なうこをいこうこつて新玉の財ーきぬれハ春さう乃
 さやういゆさう新らる隠倉山ゆとくたらうたけうの髪
 をゆいのほさうさけううく水傳ハ磯辺城さうく江の流の

祚よぬさむけお根跡のあらさ累うねさくこきそてん
 おのひー不そお招いさ井うううぬうーとて出うー日あり
 ころすてに一日と暮れいころのうこころ春ぬよ旅衣志ぬ
 おぬれくけちうううよあぬやこくれハこすくほりあたいおせし
 海や戸も何そいようく不そぬらぬ橋山をほらよ天さきの
 つこふくせれ玉洋のろよ流くくみんころつこ腰りお
 つこてまひつと安於川はう坂越てまうりのさつぎは
 らんとぬいーものをそおふ大井川系ハ座つるころりの
 ころそのぬらあ免にころうさまきりてまやうらハ今二日斗
 遅うらハ今七日斗一旅人ハ海りぬまーく人のりハせんん

をぬこくふれを城あようておちんき同ーところうまお
 ぬをまぬつくとあくころうれをれと村野のん申
 出ーおあれの藤をうまーと名いつれ山ようーこ花め
 てくりらんおと家人におひいよらんわらきりの城
 こといーとんちらんあらん家入ふつたさんこのぬりて後ん

上野國耳楽郡山中といふ所ハ我遠祖黒澤出羽守平景次大人の
 まう所もて今も猶塩澤といふ里小龍王寺といふ寺ありて遠祖の
 おくつきあり又黒澤の氏を祀せる者残り居て代々此寺残りつき
 まうれり其あつてふまのりて詠る長歌短歌

山越の
 平の
 名
 つの
 と
 國の
 た
 と
 玉の
 を

多度神社

ま
 ち
 の
 ち
 の
 ち

神
 國
 人
 も
 こ
 ち
 お
 一

命のまねさくしきまてちのまのちの太神志世にり
 うれいもく山おれい人まううーはひのまうーられそ
 祓つまうまうまうまうまうまうまうまうまう
 の早川のせのきふううーうーとねいかなふこり
 うーこきおほませとうう

寄神祇祝

田江川の遊のーらばらちーうーまうまうまうまう
 瓢形の天つやーろまづやーろさう申くせうまきくれこそ
 くぬちあとしふ天の下知し免せれいんまうくうーとられ
 とん三葉の申はの世にちんやひくの申たんのたてか

人のうひことをほへ

こつちれ神のあらふおまううーうーれー時んあらうと
 うを神をまうまうまうまうまうまうまうまう
 けそろまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

ふのまのありまうまうまうまうまうまうまうまう
 あうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまう
 むのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの
 たうまうまうまうまうまうまうまうまうまうまう

ねんまうまうまうまうまうまうまうまうまうまう
 ねんまうまうまうまうまうまうまうまうまうまう

國賀

いさよんやおほめぬと我々も〜あれはゆきあふまじ
あれい〜ちた〜〜〜や〜〜のあ〜〜
くはのちうけふい〜せいの今の世まらふ〜はるら
たんのさやき〜の〜もれ〜あ〜を
大君のこらりりて〜を〜ら〜
せよ春花のさうりの〜ふれあ〜け大津世成あ
みねおゆいそ

幸るのこらほの〜の〜の〜

文章之部

長田榮之の催めて雨の日鷺を聞てとりし題めて作ぬ。

祢そちのよささけ政のけけわのに〜
おの〜〜〜おきおん〜
の〜の戸ほそ先にあん〜
のあたの〜あけ〜
客を揃さく小咲あ〜
雪の〜〜
〜むきのたんぬ〜

うゝたまほくごを おちえん〜の

中川知春うゑる函近舎の額

家をゆくせんと名つけたるハやうてうゝいすれこら
ち〜へー あ〜山の空のふるほをほとす〜ん
たうきこまゑもや〜

浪花ふ有りのころ西田直養小林大茂うゑる梅屋安の紀

難波津ふ雪やけ花とゆりらん昔の風ハ吹か付くまをれ
と今ハ梅の本〜ゆ〜ま〜く梅後〜て花のころハ

うゑるりぬつう〜きふありせり梅屋安とぬんり〜
玉のこや〜らありハ東に天玉まよりハ水の雨ぬりり
りつ信らよほ〜とハ待たぬひあつらふ花赤の〜免られ
ては〜く〜らぬる哉と年〜く〜けの三年〜りよき
さ〜これ十日や〜うの西田の直養うり〜よりせ〜れこ
〜してすのあ〜り後〜よ〜き〜かぬんあ〜このあ〜ん
を〜く〜さ信〜や〜まぬんハおこせ〜るをぬゆの〜
お〜てぬて〜これハあぬ〜り〜ハ加納の法平と
小林の大茂うゑる〜め〜くぬ〜とのおぬ〜くハ〜
つらぬて梅屋安ぬん〜ぬん名〜ハ〜り〜よ〜

おのりいよゆとくはきとちんはひぬるふははよふ
 りり大後にあしほけふおもてこふにぬれいこふ
 おこちうりぬれいちうにあこもりあひまぬいちう
 おきういあひうううううううううううううう
 けえねあひれいこふにぬれいこふにぬれいこふ
 めてそこれ門のきうりおめりうていこふにぬれいこふ
 舟いりぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふ
 おん舟呆ちん移ふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふ
 こふいこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふ
 とういこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふ

さえやうのおあひいさぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふ
 宿のいあひいこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふ
 ひちいりうとうやあひいこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふ
 けいふさいはよぬいこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふ
 吹ぬいりぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふ
 了酔いこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふ
 ういこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふ
 横垣を菊よをれくるぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふ
 りりりりやうにたてたれいこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふ
 火いりてたやいこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふにぬれいこふ

香やハのうらうらと静さうに静ふえちうぬ風の吹ひさハ
近つとや志とと静きふいと大なる門ありて作りき
度らうよ志えくらうたりそやんさんおぬりらる。諸
折戸をききと。或折ひらひりれくうらるれハ
さうらちうねとたてぬぬさハニさうらみねあり
たらんとしゆる。なまは梅ならぬおハちうとをき梅はうん
白くやうやうめさのええんハハあうら香ハやたきの
やうにぬんちうくくうらるる。或養 笑つくと梅の
ひうりおやうのよめたそりれ時のさうらさうすれぬと
つうく折葉はううけをあゆえハやりおふ梅を

はいて石とみ多くとてたりおくのふは梅垣とくろの女
さくつうくうんもてあくらうらおまういとふあひ
あつまやうらおぬとんええくうりやふハひさあり
たぬちん傳あうらうらとつくいたよまらうとおいと
ましえて人々のほるおふあひと大茂もさうまめ
免つらうくくうりたまハおゆりうのくまう改りて
ぬの一時は太茂 川のせのたやさこのさうりのぬりり
せいあ上きをき梅とこまうやとぬんあつれとふぬハ
いこうさうやきたる女ハ二人ハうらうららけりて
出たりつほけ志うさうやうのおまてんちん漢うり

くるまゆ人よむりこりののこてりてく群くちや巻くう
 りくくかうつてくうりくるちたりまらくと大蔵ハ今ハ
 難波人のやうなれとちのうきくの故々をりハかううハ
 巻玉の石のにし大蔵ハいのちたを流平ハ紀伊藩ハ其
 ざー四方四玉ねるた巻くちやううーやいーくー　くそ
 玉の赤にあくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 うりくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 のむゆゆねおとらふまさらくくくくくくくくくくくくく
 うくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 とよこてまらうち巻く女くくくくくくくくくくくくくくく

梅の花のをく先おねりて巻ふくくくくくくくくくくくく
 くとや敷ちくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 きんくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 ちくくくと大蔵よかきてあねくくくくくくくくくくくく
 おおのておゆきこれ巻ふくくくくくくくくくくくくくく
 くとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 きんくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 おみ百くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 きまらくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 ねれくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
 55

赤らむをちこそすくうのくく小女とていそをぬぬへ
 渚平うくくよりくほのなまは何とくうつらうりく
 那と赤くして流すふわくくくたれををぬぬらぬと
 何とみきりよりえぬと思よりん私持してひきかたことり
 せれとくくくくくくわらよ大女の祇といへんく
 月まちてゆりせく人のうくくくくやふあさん園の梅は
 りくくくくあおりのてのさくし枝あけこれいりつのをと
 小う居待の月さくぬ人くおとろきくはくくくく
 出く見くふ今唯今いとま山の雪よとをぢよとてまぢ
 せよりほのくくく梅の枝ふ新さくたるま色のいそん

赤らむをちの色の見えおめてい香さくくくくく
 ーくくく唯あらぬあのをぬちりて垂る 香はうり
 思ひのほく小婿きこ梅のほくえの春の束の月七夜
 汲うけまきえりーくく溜て梅くえくくく月とま
 流す 梅の枝ふんときめくくくく城志くのとたて月
 出ふまへしたのねや 大くは梅小うはむ月影のちく梅ふ
 のこちやりのらんちと詠ちらしてたえ換うくくれと
 赤くまぬわり今いさくうかんくくくちりくくく
 花の枝くくくくくくくくくくくくくくくくく
 ちうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

舟のときふりしとてうらた夜　ふきかへし小舟の
 とほのうめうえよ教うくことかおくる月のなとねん
 りくうりれと誰と酔てよまゆぬさをたあれといふの
 ありはれ忘のそふとて酔いさへうりほみこねんとりかた
 あれは猿ふんねと肌ちきけりたはつていつくぬさ
 うこれふりり酔のほさふさひあうてはふ人二人の
 りよやう今日のあつ後のさひ出くさふせをやとねんを成
 とて法平ふとてあきさせせておのれふたの記せよと
 やうと酔とれはもうつ忘れとてわかれとゆる
 さねたいうハせんさうはとやあうつるこつとやうとねん

あつねらんちふ舟人のあまそねん舟をうらさうと
 ねんはよ

伊勢の國田にの里人うえる碑の歌

あははは原うらうらよまをりしゆくの山の梅やさしと
 つれとまふゆりし度りのあつねと今ねほうとえう
 ちんあれりりる　梅さくや春はむうの夢よ白よ
 やさしき風はうくのよさし

原春樹のるる月の瀬の梅の繪卷の序

う先ハ舊梅のりしを急みてうらうねぬめりしよりよ
 あれよれぬらうしりしよりけくもの志ぬんせうぬ
 へうらんとすハ茶茶ぬのしはもそ今世いの園
 月う影しりよまのう先とまをぬひをくへぬ
 ぢふいさうしりしを急みてうらうねぬめりしよりよ
 画まのうらうねぬめりしよりよ
 是えんしりしを急みてうらうねぬめりしよりよ
 様を又さうき又らん春ハ今のおぬハうぬらぬの
 月う影のう先

花の楼の額の記事

花小花あれよ梅たうくのきゆられハりやうらひき
 ようらぬえんしりしを急みてうらうねぬめりしよりよ
 花の楼ぬぬしりしを急みてうらうねぬめりしよりよ
 たらんとすハ茶茶ぬのしはもそ今世いの園
 たりきお徳あしりしを急みてうらうねぬめりしよりよ
 りのりよ花のやうよえぬらん人ぬらうけハさうしりし
 さえんしりしを急みてうらうねぬめりしよりよ
 へうらんとすハ茶茶ぬのしはもそ今世いの園

牡丹花老人のうら

ほくふ花のあきくぬしりよたると名こそよきりーのらぬ
こやけりふうつくーうさいとる花や何うたをちんけり
らあううてぬんいさやうーあぬうつくーうさいとま
たぬや

春海廻

一まは海士のいりりらん官やのりううはるいまふ柳川
かゝる仲のうら目みりふふあらん人ふこせまほーう
きん珠のうーあまは縄とまのうりけさ姿んぬのあや
ううまぬの信正のいさひのうららん筆つきり

やうかあてこゆふをきりー先さーあらぬおちとえ
りよくすあらぬ志あひのうらまはいとちけきたんぬ
の指つき蟹ぬくのたまひありくぬんやうにむらくと
こゆふハ玉や見やとけうあまやまらんこらうまの磯の
若免うりあけふぬとまうーいづるーうー

春の海の家の中のはし小舟こやいー人のんぞそつる

涼

夏いよる月の赤きうを風をぬくてみ涼しけれあらぬ
たーとぬうらんうちをよきたらんぬん誰うらおろー
こめてのまはあらんとけらんおほくぬちらむくくに

こころはまのらぬあはれとてあはれはまはれとてよめたや
 ほきやうあはれはいそいそあのおのの門の柳を夕顔
 柳の下にこねてふえぬいそいそあはれとてあはれとてけ
 たらんとちとて友をよそけふめやけりれこやこわたり
 のこころの涼にありあつまのまをこころ川あはれは名は
 こころとてあはれにあせあゆむちちんはるやや
 ちちんふあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 あせあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 もあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 のあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

舟をうけてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 ちちんふあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 ちちんふあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 ちちんふあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 ちちんふあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 ちちんふあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

夏の夜人をこよ

月のあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 きつてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて
 柳の下にこねてふえぬいそいそあはれとてあはれとて

しうねのしらんやとくさうきのおらうてんふりて
秋のけうねる後うふいとねんひひちくくうらるるさうは
くさうさよひあらうてさうさうさよひくねち先さう昔
ありらんはくさうのさうさうてねん

伊勢の國人の乞る陶後園の記

昔よりうら人の菊をさう多て先付くうりさうハ
りくさうとんあらささるさう仲よさうの園めくうら
らるあんせふささるさうけくけくさうハさひうねれハ
ねさうけあうりうつー裁てさうねあ作り校くさう先

かきりてりてあさう人いさうのえにさうねくさうくさうら
ねとけさのくさうのさなととふ白りさう花のあさうの
さひさうのささるのさうさのねさう愛ささうて陶後園
とくさ名付ねれらんさうささるいあさうねらさうやと

秋海望

昔男ありらむむさうのくさうほさうさうふあねんをれり
らるおの男いさう思くうらん女をさうさうねひてさうさうふ
めくさておさうさうふまよひ申ささう信月のをさうさうふ
ねんありられハ月あさうねねれとあめいさうさうあさう
ねらり尾花の家あをさうてれりれさ何そさうえさうさう

けとお鬼もやくりねんしほよとろ免さうて万れ
 思ひこゝをばらんとささふゆゑにむねのこころこゝして書みよ
 ねりとおお申の辨のこととねんしほやうしむむしと
 卜つうされさうひますほきふたり川ぶよのこおこまをこゝて
 思よ人にくしれり互ふらねしとさうさねんしほめし
 申さくしてうらうらおまのメおよりあはるぬおまの
 思ひこゝけてささふゆゑにむねのこころこゝして書みよ
 やましとね思ひこゝをばらんとささふゆゑにむねのこころこゝして
 くりと思ふおはくしとふとあはるぬおまのこころこゝして
 男と女と故々ふたふたうらうらあはるぬおまのこころこゝして

思ひあはるぬおまのこころこゝして書みよ
 いふおらととこりふらんねんしほよとろ免さうて万れ
 思のこゝをばらんとささふゆゑにむねのこころこゝして書みよ
 白細う目とさうりてくれけんほしはぬんかんねんしほよとろ免
 思をうらうらねんしほよとろ免さうて万れ
 思ひこゝをばらんとささふゆゑにむねのこころこゝして書みよ
 申へんおらととこりふらんねんしほよとろ免さうて万れ
 思ひこゝをばらんとささふゆゑにむねのこころこゝして書みよ

村雨

旅ふいしととろ免さうて万れ
 思ひこゝをばらんとささふゆゑにむねのこころこゝして書みよ

たしきよれはなれし山崎ちこめく一村ぬのえらしく
 ぼくちらふとまをたぬちやのたけまひぬこに又ま
 めいせぬのちらふしぬちよふ一たあらし山にのりく
 ちのちらうりのせちのちちよふのちらうり谷こより
 ちこちらうりぬせちらうりぬせちのちらうりちこ
 ちらうりぬせちらうりぬせちのちらうりちこち
 世界よまのこちらふなれちらうちこちらうりち
 ちらうりちらうりちらうり代の昔けらよたちえてとち
 らあらし又せちらうりちらうりぬせちのちらうり
 ちらうりぬせちらうりぬせちのちらうりぬせち

かきまうりちらうりの山のちらうりぬせちの
 ちらうりぬせち今画のちらうりぬせちのちらうり
 ちらうりぬせちのちらうりぬせちのちらうりぬ
 ちらうりぬせちのちらうりぬせちのちらうりぬ
 ちらうりぬせちのちらうりぬせちのちらうりぬ
 ちらうりぬせちのちらうりぬせちのちらうりぬ
 ちらうりぬせちのちらうりぬせちのちらうりぬ
 ちらうりぬせちのちらうりぬせちのちらうりぬ
 ちらうりぬせちのちらうりぬせちのちらうりぬ

里笛

おまの法柱のちのちのちのちのちのちのちのち
 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
 ちのちのちのちのちのちのちのちのちのちのち

あまのついでにすまじい。苗のきれさこそおのけい
ね。侍ふうのたらんおやうけ。都のつふらさ
と。のそぬほ。うり。明日香井のあらふが
やうてら。ま。さ。う。こ。ふ。宿をころうたを

浅間山

信濃に本より山ふよ。木骨の清坂のうね。こね。こ
山ち。ぬ。おん。ち。さ。浅間のひ。うり。い。ち。れ。ハ。敷。城
を。ぬ。れて。お。ろ。ろ。さ。え。ら。う。の。山。を。の。ほ。う。り
ぬ。り。う。ぬ。あ。て。と。く。た。ぞ。ぬ。お。り。た。ら。う。さ。の
中。ぬ。を。く。被。た。あ。く。ふ。あ。く。さ。の。は。う。り。城。や。う。て

ぬや。と。き。た。れ。て。こ。れ。ハ。浅。野。ハ。音。か。ん。お。ま。り。ら。お。お
山。ぬ。ぬ。ぬ。を。一。人。き。う。つ。め。ら。せ。て。浅。野。の。り
林。さ。う。山。む。や。む。ら。う。れ。う。す。の。山。は。は。た。れ
浅。野。の。け。た。を。き。こ。う。き。ふ。く。ぬ。く。よ。あ。り。ら。れ。と。あ。の
あ。う。の。り。き。に。ま。ぬ。よ。う。た。あ。ら。ん。う

山のうね

山のうね。ち。ち。り。の。昔。ら。さ。る。名。ん。は。え。う
今。と。た。あ。う。半。さ。う。ん。つ。ま。ま。め。の。れ。く。の。あ。を。い
ふ。い。お。ほ。き。ぬ。山。あ。り。ち。ち。ち。ち。ぬ。り。う。さ
り。の。お。を。と。は。ら。ら。る。尾。張。人。の。さ。う。う。た。れ

〜うらうらふ今ころこれぬ〜うこ〜いよ和国の〜け
のたの〜こちうふ人のむ〜ちのき〜ふか〜
為ちうほいてあつ〜いさ〜ういよおれよさ〜お
の〜れよ〜りぬち〜の〜ひりてあ〜ふかある
らん又今〜うた〜ふり〜の学生水谷の氏古い伊勢の
國人あて〜その冬〜か〜りんのるふわ〜りき〜りら〜あ
そのたよ〜岩瀬ふ郎〜この昔物後々きたる〜名〜のり
て〜わち〜このま〜ころうてお〜てこのねとこつり
なま〜。日ら若ふねんあ〜う〜と〜りよ今の序世の
ら〜の〜まふ〜の〜わ〜の〜さ〜め〜の〜せ〜く〜らんと

あや

こーうき

旅ふハ馬おひ〜うき〜りよおねんあ〜おれら〜うやう
のさ〜の首を始〜て何〜れの〜あ〜も〜ど〜りて〜さ〜い又
旅する人を〜うき〜あ〜うき〜お〜と〜ま〜を〜お〜の〜お〜り〜を〜は〜と
お〜〜ら〜の〜さ〜り〜ら〜れ〜い〜う〜ら〜う〜ふ〜馬〜を〜り〜て〜お〜の〜つ〜は〜ま
〜は〜余〜と〜つ〜わ〜く〜〜う〜免〜れ〜ハ〜馬〜城〜を〜親〜と〜れ〜え〜
〜と〜ほ〜〜む〜〜う〜ん〜か〜を〜お〜れ〜さ〜〜と〜あ〜ら〜て〜お〜た〜ま〜
〜お〜お〜さ〜け〜お〜う〜む〜く〜つ〜け〜は〜ま〜は〜〜と〜さ〜〜い〜〜あ〜〜ら〜
〜さ〜〜い〜〜ま〜お〜ひ〜ハ〜ま〜より〜む〜〜い〜〜う〜さ〜〜い〜お〜け〜お〜。

のく馬をあーうほめておのうけさつるたうゆの
 ふせやあつていつこの浦めぐつのでてよまわれいりぬる
 後のあまれたふれぬるふまれ其方のきこぬけさふまき
 たりぬる免ことこのあつてうきたるあふにあらさん
 ぬるをけりうきこのをのこもよ定まぬるまよあなれ
 たりつこのぬのあー志らきす思おのうろろのむく
 所をぬく志をらくと足ぬくある所を定りて
 名よらんがふハこのやうぬるまきたよとあり又
 ころうのやうぬるおとまひつるぬれもてあひ
 あつるふありたぬた赤をこよてこまきさけつを

せんくーきさつちぬるや名よらん位ある人のまめ
 くるするまきたころうんたすく名よあをんぬれふき
 たさこぬるぬるこのこふくふくの文領免きたる
 名をよひつるてぬるぬるぬるぬるこのけあさるや
 ととおきてた何ぬれせんぬるぬるぬるぬるぬる
 傍てこのまぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ
 づるたよさきまぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる
 ちりれてあつちぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる
 おつちぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる
 ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

人とぬらんとやいらん天さきのそらふたよらんぬんやう
 かねたものやそのむきを名付てきとぬんよりりやふ
 かんてに眼つからふひけうらみく形おころう
 うらまーけぬおころらんいさーぬあらぬ考さゆや
 まるらん昔は何ういひらんきく〜〜人これうど
 りいらんいつきむゆとあらぬあをれいららんこ馬
 のふらんぬんといこまうねん〜たぬぬあり又より〜と
 あよむ〜さぬ〜あやぬ〜きぬぬあきり友のて
 日よぬ木後り〜冬んとせされたむくろい〜の
 やうに悪〜冬のをきや〜赤を〜もてさむけちよ

扶桑木

けさ法作ぬ〜ちりたをよぬ〜
 いろ〜世の中をさ〜りのほろ〜てきちらふにたらきた
 心とせきをたれい〜く〜けぬ〜の〜あ〜
 けさ法作ぬ〜ちりたをよぬ〜
 谷のうのれ木ぬ〜〜〜きおの〜ぬ〜
 こ〜ふ〜〜ちらやま〜〜い〜の〜ぬ〜
 うつれたらんぬ古代ふ〜つれ〜んぬ名におぬ〜
 う〜ぬ〜らひぬ〜お〜ゆ〜ん昔人ぬらん
 こ〜らふ何〜の〜む〜ぬ〜ぬ古代の〜

一う人のやうにおねくひん名あふむかあるとこの
 うごのこれてせのほきおとめのみをさつてゆくこと
 にはとほきさたりふねうらの拾粒とふあるをこころよ
 ねしつら夏のおちん祚ふりうとあれとよされねく
 ちとるおよみやあるらん今程風穴とてをらあふ名を
 あせるおねんある甚少くはねとさまふちうこの里に
 ありたりわねくの郡とねんりよとほきをこよりゆくり
 ねくほり出とるほれ本のゆり先とて古代先きたるを
 里んともたまうとやけりふ何くれのお洞と出てまよみ
 ひとらおくれりらとをいとちうらうとさつとて

ほれ本のくちせのせくふつてくまうとてこの里の名あを

中原公満あま

ちむくらのかふるところの仲のいぶ新とらう葉つとあ
 くらとらやうりうらんやうにさえのこのよとらねく
 りれとるは今よおきていほをちいま公満ねはさ
 くれとん亦あんねり学あいのおれ親ういあを子をさ
 らのむねうらさらん志とてふ今あつとくを
 よくきつねんおとくいまのまら祖いのらま
 うこきとせうのうさ穴のあふ天のく志らうとて

ぼくらまのむねまき〜てさゝきまきみせん十市の宿禰と
 ぬんりりらる奴申は田鞆院のこかこの天延のよとせ
 といふ細長のこつとねふ改をこまきり從四位下春立
 のまのせようむを娘で伴京の氏いぬれりらる〜ぬん
 りよむらうこの子の八十つまおほやけのををせ〜て
 いうむらこのこつ〜あつ〜うらまらむらむのせ〜ふおぼり
 其たら〜あ〜りま〜公満及のまひ小らら〜と
 小何らむむ〜のぬき〜ま〜の〜天〜らら〜と
 まけ〜ら〜け〜ら〜又そのまら祖ふ方を耻おむ
 何ら〜ら〜ら〜ら〜と〜と〜と〜と〜と〜と

昔とて今とて人のおららめやまねた〜名を〜らる〜と

雲間のぞ見名

天地の神のぬ〜あま〜く〜男女〜むらむら〜天の
 ま〜人〜神の伴ふ女〜ら〜あ〜世の〜あ〜む〜は〜相の〜
 三粟の中つせよりぬり〜あ〜は〜の山田の〜は〜お
 めを〜き〜む〜は〜さ〜人〜竹の〜〜の〜は〜た〜
 ふ〜と〜く〜免〜の〜あ〜む〜ら〜教〜ふ〜大〜の〜人〜ぬ〜は〜と〜ぬ〜
 かねりらる其始をあの〜ら〜〜〜あ〜あ〜ぬ〜ち〜ら〜
 めの神世をを玉〜ん〜き〜ら〜ん〜と〜文〜ぬ〜れ〜ら〜ん〜男ハ

伊達ののうつき女はくぬは急のうつきをさそてうつき
 清世ふは定をえおきてまして久うくの天地のこゝろを
 玉の赤きものこゝろをあはれらたはくゝおはれんあり
 くらゝ石の上をうりおみよあはれふくまひつられて
 つまきこち其名をたられゝおほくはけ人おらひのまし
 きふおみよれりりゝこのまの玉をわつをさちち人を
 金戸おあてゝちちちち人を始てうをををくみこの
 方をぬけん桂子花をううゝゝゝまてたてたこの
 くらゝくらゝぬはれき花かてゝのひゝりぬけ出てたま
 んふたへられゝゝうゝゝのてをぬをさせは女とらよ

おの清くをぬけくゝうりられ青く此の夜をさそてふゝ
 あやふつまれゝゝいとむ思みたゝちまきわりりん
 淑ふうほよりゝは足をさそていとをえまゝの入りおむんうて
 まゝろちうりん足をさそて淑ふよき人ゝとをいさそえん

酒のさるゝ女をさそてくれよ

世のひきこりのゝれんかゝぬ赤のお伊せんゝゝゝたん
 のゝゝゝ集ゝの清くぬおのうゝ世つうゝゝゝゝ
 まゝとてお伊せんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
 んゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おくこもくまんと女とりよきいよにあやうみくたうら
 しく何ういぢれは何ういぢれきやまかろる老のよみ成
 しくて信らん是は二のゆはくはひるくはねとよりみ
 こよねくはあをくれはねううとてまつくちをえ
 しまつて一とせおふより森せしは成たり四糸目くりに
 白拍子とりよおうく思ひぢき先付くくせうおこねと例
 の又ああよきまのあておくり信りおられと彼はねふそら
 をたふえをうくくく志らぬよやあらん洋人あて
 ぬききほとき言れ義を又志らぬやうめてねん信りし
 さらこの何ういぢれ長のとちとおのやうふらう志ら

してちそははくくうのこまをまおくとまこくうくく思ひ
 たをううてきをんの長うりまねりてあらうハこよらま
 の後まてんめく先ありきぬく例ねくぬくきたひも
 うつたうううてまらこや志り信らぬ今おのゆとら
 めてた和はあのおよひころうねくうよをまのうり口さ
 一とほりううきひぢき一ハハさらぬくふまのひまの
 こくさくいらぬくくくつてさうらうう笑えうて今を
 さらねいおちぬくうねまをまをくまを和お一ふ
 うんと思ふふつれたてしおハ思ひこつて一にらんをまを
 ゆきふくそくくく志らぬめくおらうらう先酔てハま

石上うさくうらうらむささのせふひつてらうくそ人と
 あゝおのねきさくおさうよびく先くつておんりよ
 おけきのあふりまねふくきまん神さおんおきさハ
 先くくく中てねきさるまうらくハ先を二粒の大神
 よう踏てをさかをくくふおんをりておん親うつ
 くむりくつさくたへてくつさるよままでん
 けねうらふ村行のふつさぬいあらきりらら
 人の衣うりきたらんあーのまま短うまをけたらんを
 きてその枝をりたらんそのてうハくさくたらんそれらを
 こそハ天つ罪國つ罪とんあらりよこまぬのうおきて

くらめちちやうの神れいさ先ぬろそ 念せーと
 りよこぎきいけまこりり先家ふ何のーの娘
 何のーとおん中い言本の大神のあふさーふこつぼく
 らうくむんをれ出て太さうひのぬさのりよあまおん
 けをまちりよ神こりちておおとえ先ぬりねあ
 ち先ぬりねとまをいことをすー先くつれてら

中後

瀬川福義うきる短尺帖の序

人ゆいぬる短尺帖うらおまてえんそそ思ひくそつ

おのころこころとてさういふものせういふに
おきぬのそらうりー昔のちりーらあふうとらうは
一くおほくけつくよれさういふいふきさ
ほくささ

ある人のえる書画帖の序

女りーいふきささぬくともう一人のりあうりーをこと
りさこと今くさくふまぬは侍てりーらあらぬ
にうきおきぬおきさうりー様のぬきくさあ
さうりふまきささうりーらさうりーさうりーにぬき

まさぬりらぬらふゆほけりぬおほんせのてうりと
こそりささうりー

甲斐の國山梨郡千代野村万勝寺亮岱法師の乞ふ一切経勸進
帳の序文

地をほさちハあまうきをさふよのくくして世の人たすけ
さやとくくりらにえさうりぬきをわういせん
こそくくくうきおきぬ佛ののをもおいとさたん
ぬあハほくささうのらうきさうらうらう
たよあさうをさうりて一切のぬきくさたらん人ハ

山梨

とをよもすつーとをよもすつーのくつよおきていふよふさ
くえぬつとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
いづらつとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
ほきつとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
つとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
さつとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
つとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
つとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
つとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
つとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
つとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ

にそつとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
くつとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
ほつとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
つとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
つとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
つとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
つとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
つとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
つとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
つとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ
つとるつとるつとるのくつよおきていふよふさ

或人の乞る林道春の道の記の奥書

歩まぬをいふはくつとるつとるのくつよおきていふよふさ
れせよはくつとるつとるのくつよおきていふよふさ

いづき皇國のひよで世のおお知人とりよ伴ふ一人
めらきてねん有られハ者ふ悪くく名くうらふ今
はるの記をえすい〜名ひをねんま〜めい

兼好法師のうらふ

あくの市ふあしうありてきをせくね〜らひては〜
たうらんまきく〜らふ〜やひ〜うらん〜を〜

別部香苗のえる古意齋の額

け庵ふふいじんあねうからゆ〜の本をぬま〜はらう

えありふつきてはゆら〜のゆ〜の〜えんま〜
からねねありら〜をき〜年ぬむ〜らのあふぬれやん
てうり今ら〜の太の萩の花はり太わみ〜きをあま〜
ひてあまのの〜を〜え〜ら〜あ〜ら〜ら〜
ら〜の〜の〜ら〜〜
早ううら〜の〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜
やの〜を〜わら〜つ〜け〜たり〜ら〜ぬ〜あ〜の〜つ〜ら〜ぬ〜あり〜と〜え〜
を〜ら〜

中木光温をら〜む

是彼のあまのついでの中よむつううのついでに
 何れのかうちきかきもかきかきかきかきかき
 万ふくくうらきりれにけりへえきとぬぬぬぬぬ
 くきりれふんきりりそれゆふうううぬぬぬぬぬ
 ぬうう難波津のおやとぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 痛ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
 うきううりりれ其まううまきの目もめて准彼よせ
 ほうほうせちのてううんとて後撰集のあてま
 ぬんうらふとひびてうりゆらぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 ぬりらるさくぬん例のけりれう何れのきりぬぬぬ
 せちゆいえううううてはてはてはてはてはてはては
 うりまのてきうあやう杖とぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 一人おのせのぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 ともぬううううううううううううううううう
 さいくわいぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

岸頼典をうらむ

姓にあらまうてそのれ典とらよぬんいうききききき人あり
 ううううううのあまぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
 おれこのまよららららうういふをぬぬぬ人ハ君ぬぬぬ君をぬぬ

ねくしてまちに嬉しと思ひつりーさぬの今ねおんうらふ
 つくさひてねんおりの長きまめれぬる寺ハ持田の何う
 寺ねりたりせきこの名おふえうりのいさふこうつらひ
 申さていさふ悲しき子ねんおちのりらるる平比例の泣る
 くさふハ何れのものにたててをさくハをうーと笑ひ
 法師のまめのいさふいさうりて川守とや布りよまさうく笑
 をさふ悲しきまめはあーいおぬるふささささね
 ちうたらいほいさうりのいさふまめいさふねつらうーい人
 のさくまのいさふまめいさふいさうりて申さていさふに
 ちんくゆーいさういさういさふいさふいさふいさふいさふ
 ようハこよねうきれふりねんおせうおひて人あらけ
 ふうりおりのいさふあちきねさせふさういさふれをうり
 後ハいさうねくらんぬ又おのうーいさふねんいさふら
 泣らひいさふいさふいさふいさふいさふいさふいさふいさふ
 泣らひいさふいさふいさふいさふいさふいさふいさふいさふ
 泣らひいさふいさふいさふいさふいさふいさふいさふいさふ

加藤春樹の追善會の祭文

天の十國の八十國時の百篇を始て神をさくさくせりし
 大祓はらふまめいさふいさふいさふいさふいさふいさふいさふ
 有られいさふいさふいさふいさふいさふいさふいさふいさふ

神のこゝれこゝより人の命のまゝまはれしるおんあはれき
 りの極におりたるそのまゝまゝのこの世のあはれ世よの百
 倍よちをいふある故何れれそや君大臣臣のね巨春樹
 い年のそこのせよえとてたのり神と君のうらやめ
 りよおんく一人のおのりくこのあひ今まのあはれり
 天のうらやめくはあはれよこをうらやめをねはきこ
 君の程よりあはれり入るもてやしくおんあはれの枝
 とみねとみねをうらやめをいふとにふまゝの涙
 ちうらやめくおのりのねしこはまゝのうらやめりあはれり
 めん集は集るあはれりあはれりあはれりあはれりあはれり
 むつあはれりあはれりあはれりあはれりあはれりあはれり
 をうけよとほはてはるまゝの神におりてこゝろ
 りうきあはれりあはれりあはれりあはれりあはれりあはれり
 ねねりよ

春日願う石川氏の事をまつねの時ふとる祝詞

足巻を忍ぶと吾古神の大ありやさく現世おふ大
 まゝく一時はををら祖の傍ふまゝて所思ひがね
 遠くくけくをくく世のまゝををのねるまゝは
 大津くおたうくまゝくねさやうく成るたぐふ命

殺して浄らつうらんやうて現浄必をうぐうのり
ゆる其ら〜怒らせる浄魂ゆつ岩村のく〜りおて
たらしむふうごさのく〜長〜りて今代やまんで
う〜てあらわれ吾家早くほろはく〜くさ〜のこゝに
たひむ〜り吾子ら〜りてほ〜〜らまのを信ぢ
〜ひ〜り平をまねたやれのみつこれのみまうはうと
〜も〜のおら〜ら〜らぬ〜〜れ〜をりて〜ぬん
〜〜〜法原〜のそのも〜らるは〜ら〜
ま〜〜大社の浄魂のつきまうら〜て〜ら〜まの
〜り〜ぬやあ〜うれ其浄魂をやら〜まう〜ぬの

浄翁をららきまうら〜又其浄翁の家を起〜てあらうき
世ふは〜て〜さ〜は〜う〜て〜さ〜は〜ぬ〜ぬ〜ぬ
り〜うれ大社のう〜りま〜り〜り〜十日を〜
日の定見〜定見〜定見〜日のおく〜るありら〜り
あらう〜り〜り〜り〜二柱の〜り〜
をま〜ま〜り〜り〜り〜大翁あらよ〜山のお
〜り〜り〜のおきたら〜り〜そのの〜り〜ぬ〜
もち申ま〜り〜り〜り〜大〜り〜り〜
又大社の〜り〜り〜り〜を起〜り〜ぬ
氏人を〜り〜り〜石川の名ふあ〜り〜常盤よ〜り〜

大なるものついでに絶ゆる事ありておのれと
 あらざるものついでに絶ゆる事ありておのれと
 ませりしきまつり氏人をおきて絶たざるを
 ついでに今より後に大清心をたすまてたる事
 ぬくあらむ事ありて天のなり國のなりませる事
 祚のこたよはるものついでに絶ゆる事ありて
 志つまつりまはねとすん又この世をたすまて何なり
 うらむ事ありてぬく事ありてけく事ありてついでに
 くる事ありてぬく事ありてぬく事ありてついでに
 昔もまゝの志をひろき大清心をたすまてぬく事ありて

今も昔もあつてぬく事ありてぬく事ありてついでに
 是れぬく事ありてぬく事ありてぬく事ありてついでに
 うらむ事ありてぬく事ありてぬく事ありてついでに
 うらむ事ありてぬく事ありてぬく事ありてついでに

栗本静子の六十一のほきこし

あらむ事ありてぬく事ありてぬく事ありてついでに
 けさぬ事ありてぬく事ありてぬく事ありてついでに
 はたぬ事ありてぬく事ありてぬく事ありてついでに
 はたぬ事ありてぬく事ありてぬく事ありてついでに

あつくりうのおりくや家葎居のあふめれてうくふ
学みの日さへ言ふんぬ。故くくくくくくくくくくくくくくく
いたひくくのちぬんよむ雀海ふくくく松竹ふぬすく
おとくくよにあさく。おのり末ふと移よまきくを
浮ぬくくちやぬぬくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ひうまのおむぬよぬかひんちやひんちや換りてね
りくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

井上泮蔭の乞ふ父の七十の賀ふ

老れぬすの薬やきくくくくくくくくくくくくくくく
汲ぬらくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
みたくむくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
かんによむくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
あらくぬくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
人のをのへえをさくくくくくくくくくくくくくく
かろくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

漢方より秋の長み百秋ふたよつこの後より秋はくたこ
くると秋はくいつきまうらんおそと持ておくねつき
めききくやいのうこうくつねきまをうたう
おそくを神ちううらえくまひやうめいておのれ令
のよきこころまはこれのうのくふえけり常盤り堅
堅くおまうまうまうて秋の守り日の守りにまへらひ
まーおん怒まのらひまうていくのり日のまうまう
おくまおんの鏡あきうらにるのんいさううらおそ
をされ志りさう年の志ふ志りくをさけきほふ
あらりれてるのんいさうえおんおそは学えふいろう

おんおおくくうらう秋のほく赤くいける志り
うまうけてね

縣居の翁のうくまをまうれる祝詞

いあ一年のは月は日越いきのをの極ことうう
清方をうくうめいて天の志りうめう家さちのやの
大祇のたまふまをさくうの太清國は百八十のうら
くにまのおやまのうたるは百八十のうらまのな
つらちあねあうらうを伴ううううううれ志りの
志れ人もまのうけの祇おあけまうううあけくちあ

つねにともよのるふこはつききて皇祚くちのまゝの
 石はほくく後めくくちりあさうー成はきさうの馬
 のとき耳まのやまの焼のゆららままこのて
 るたくのほくをせまー又あーあひて又今のせふ
 いちーろくおりにさるまゝく家大祚のまゝの
 少中少ぬえよれりるうれはをららむり祚ろき祚
 ろこの令えちてまあめいをくまひ皇孫の令のま
 つまひおろぬいぬのまをさるふの瑞穂の園のこちの
 中の令と声名をたてて思あのおふのやまうよきて
 ろこのこあらうのつひまうつひてちまのふはいつこてんら

いつ株ふハゆかりきてまよきて白ふきてとらうつる
 きふまんらの焼み直りぬくの八十玉岸とらおんて
 たてまゝーおきくらふハ焼玉の夢のをーねのハま穂
 のたりほの初穂をいうーらけらこのーきてたこの度
 あらうおんてとらうののおきたはりーこののたらとて
 おんてたへ言をくまらうくそ天地のまゝの常一
 學藝ふこの大きるのつくまひおくはさくちちくち
 まいへふさうえ申へーおのまのり日のまのりり
 まあらひまおんてまおんてまおんてまおんてまおんて
 をちちへういんさおよそあれぬー吾堂ふらうく

いぢ〜こつ〜あふろろき〜成儀〜す〜てあめの辰を〜
 を〜ふ〜う〜えん〜先づ〜と〜う〜お〜う〜ね〜つ〜き〜ぬ〜ま〜
 思〜く〜や〜け〜う〜と〜こ〜く〜や〜め〜こ〜あ〜辰〜辰〜を〜天〜う〜ん〜り〜玉
 う〜ん〜り〜つ〜れ〜祢〜より〜極〜ふ〜こ〜う〜り〜ま〜〜琴〜う〜の〜も〜に〜内〜教〜を
 あ〜ら〜な〜し〜ま〜う〜て〜あ〜ら〜ま〜い〜き〜さ〜ら〜〜あ〜ひ〜て〜さ〜ち〜を〜い〜ま〜さ〜ね
 とまをん

ふ〜お〜ん〜の〜お〜い〜は〜お〜い〜〜あ〜の〜
 以〜上〜に〜あ〜し〜は〜お〜い〜ら〜ふ〜あ〜〜
 思〜い〜ら〜〜と〜〜あ〜〜集〜の〜に〜あ〜〜い〜〜様〜お
 ち〜ね〜と〜字〜あ〜ら〜は〜〜あ〜ら〜〜〜あ〜ら〜
 か〜ら〜〜傳〜可〜る〜記〜海〜紙〜い〜し〜〜様〜け
 世〜に〜母〜は〜ま〜き〜〜〜人〜あ〜ら〜あ〜ら〜
 ち〜〜〜あ〜ら〜あ〜ら〜あ〜ら〜あ〜ら〜
 ね〜〜あ〜ら〜あ〜ら〜あ〜ら〜あ〜ら〜

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

ねのちも種まき、花はかたはちかき、
よふ波風、ららら、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、

ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、
ねのちも種まき、花はかたはちかき、

赤松
木お倉一
巻



